

2015 年 11 月 29 日(日)開催 2015 年度秋季大会のご報告

2015 年 11 月 29 日(日)13:30～16:00、衣笠キャンパス敬学館地階において、2015 年度立命館学校教育研究会秋季大会が開催された。全体会では、森田真樹委員(立命館教職研究科設置委員会事務局長)より、「教職大学院の設置構想」について報告も行われた。今年度も昨年度同様の 5 つの分科会に 100 名程の参加があり、各分科会とも講師のお話をもとに熱心に討論が行われた。

当日は 16:10～17:00 まで、今年度実施された教員採用試験に見事合格し、春から教壇に立つ学生たちを励ます「2016 年度採用 教員採用試験合格者激励会」が、立命館大学教職教育推進機構と立命館学校教育研究会との共催で開催された。2015 年 11 月 29 日現在で合格が判明している、延べ 242 名(現役 102 名、既卒 140 名／数は正規採用のみ)のうち 40 名の参加者を多くの校友教職員が激励した。

引き続き開催された懇親会には、4 月より当研究会への入会を予定している採用試験合格者と、会員・現役学生など 80 名ほどが一同に会し、会員相互の情報交換や新たに教壇に立つ 学生への励まし、またこれから教師を目指す学生たちとの交流など、有意義なひと時を持つことができた。

第 1 分科会 「あなたの夢を支援します ～多部制高等学校の取り組み～」

- 講師 片嶋 智之 氏(兵庫県立西宮香風高等学校 教諭)
- コーディネーター 児玉 敏男

第一分科会では「あなたの夢を支援します～多部制高等学校の取り組み」と題して、兵庫県立西宮香風高校の片嶋智之教諭(理工学部卒)が、自校での教育実践報告を行った。まず、西宮香風高校の入学式の様子から始まり、特色ある施設設備の紹介、そして1年間の学校行事や多部制ならではの取組みを映した映像を拝聴した。西宮香風高校は午前・昼間・夜間連続 12 コマの3部制、2学期制、単位制高校で、多様なニーズ・多様な生徒・多様なカリキュラムと、「多様性」・「自由」をキーワードとした学校づくりに努めてきた。その結果、国公立大学を目指す生徒や、勤労青少年・成人・外国人生徒のみならず、不登校経験生徒や特別な支援が必要な生徒の割合が元々多い学校である。

今回の発表では、多様な困難さを抱えた生徒に対して、日々、先生方がどのように取り組んでおられるかを、具体的な事例を挙げて説明頂いた。特にUDL(学びのユニバーサル・デザイン)の考え方を参考に、「一歩踏み出す取組み」として、東北ボランティア活動・タイ王国との国際交流・ボランティア実践を紹介いただいた。更に、授業科目「社会技術基礎」で生徒のSSTやアサーション、ヨガを利用したストレスマネジメントを導入し、他者との関わりを深め、自分の意思を上手に表現するなど、問題解決の方策を知るための様々な取組みを学校全体で試行錯誤しながら進めてこられた貴重なお話を伺うことができた。

今回、司会者の同校元教頭、児玉敏男氏(現兵庫県立氷上高校校長)をはじめ、京都・大阪・兵庫の高校管理職や教育委員会歴任者が集い、普遍的且つローカリーな

話題にも及び、「広く深い」教育論議が行えた。立命館出身教員の裾野の広さを感じる頗るアカデミックな分科会となった。

(文責 岡本 真一)

第2分科会 ワークショップ

～情報モラル教材「非ネットいじめ三原則作り」を通して話し合い活動を考える～

●講師 富永 直也 氏(立命館大学教職支援センター講師)

●コーディネーター 平岡 信之

講師の富永先生は、京都府の小学校教員として長く勤められ、管理職など立場を変えられても、現場での実践を大切に組みこんでこられました。今回の分科会では、その実践のお話や教師として持っておられる視点についてお話しいただき、参加者はワークショップなどを通して学びを深めることができました。

最初に富永先生の実践についていくつかお話されました。まず、パソコンが導入された当時は、子どもを引き付ける道具としてパソコンが使われ、そこで楽しい授業とはどんな授業かを考えられ、工夫を凝らした授業例をいくつか紹介されました。

14年前、当時はいじめが問題視されており、富永先生は、この問題に対し、二つの学校間でディベートに取り組みました。いじめの加害者と被害者に対してだけでなく、先生や保護者、友達にどんなメッセージを送ることができるかを考え、公開したところ、全国から反応が多数あり、いじめについて考えることの大切さを語られました。また、不登校児童へのICT機器の活用やゲーム感覚での活用の有用性についても考えてこられ、その実践のお話もお聞かせいただきました。

人権問題などに取り組む際に、「～はいけません」ということばかりが教えられることが多いが、どんな力が必要かの議論することが大切だと話されていました。「教える」ということから「学ぶ」ということへ、価値観を見直す必要があるという話をされたうえで、ワークショップに移りました。

最初のワークショップを通して、それらしい知識を教師が子どもに教えることの危うさと教えることの重さについて話されました。そのうえで、これからの教師に必要な力として、ネットワークリテラシーとアクティブラーニングを挙げられ、それらを使いながらゲーム性を持った話し合い活動として、二つ目のワークショップを行いました。

最後に「非ネットいじめ三原則づくり」を行いました。まず、参加者がネットいじめをなくすにはどうすればよいかを考え、付せんに書きました。次にそれらを使いグループで話し合い三原則にまとめていきました。この活動のコツとしてグループ化やランキング化を使うこと、留意すべき点としてジャンケンや多数決は行わないことを挙げられていました。各グループがそれぞれの参加者の価値観を尊重しながら三原則を作りました。最終的に電子黒板を使いながら、各グループが意見を交流し、今回の分科会での非ネットいじめ三原則を作り上げました。

今回の分科会で、子どもに活動させるうえで、アクティブラーニングなどの様々な視点の大切さをお話いただき、参加者も現場で実践することを考えながら、活動に熱心に取り組み、充実した時間を過ごすことができました。

(文責 溝渕 誠太郎)

第3分科会 「地域と学校を創る -生徒指導、学びの保障の課題を地域と共に-」

●講師 丹松 美代志 氏(元 大阪府池田市立中学校 校長)

●コーディネーター 山本 宏之

「いい学校」とは、問題が起こったとき、教員間で情報を共有し、チームで解決できる学校です。しかし、問題を解決し「いい学校」を創っていくためには、保護者や地域の協力が必要不可欠です。そこで、まず地域と信頼関係を築いていくためにさまざまな実践を紹介していただきました。具体的には、学校での出来事を伝える校長室通信、地域とつながるふれあい教育推進事業、しっかりとした学力をつけるための土曜寺子屋などがありました。特に校長室通信については、地域に学校の情報を全て明らかにするという点で、実際は難しいところもあるのではないかなどたくさんの意見を交流することができました。そのようなさまざまな取り組みを通して地域と繋がることが、子どもたちの豊かな学びになる、子どもたちの豊かな学びを保障していくために地域と繋がって関係を築いていく必要があるのだということを教えていただきました。その後、さまざまな実践やそれぞれの先生方が抱えておられる課題について意見や考えを出し合いディスカッションしました。その中で、授業をオープンにして学び合える教職員同士の関係を構築することの大切さや「地域があるから学校がある」「教師はやはり授業である」など、教師としての基本を思い出すとともに、何のために教師になったのかということも考えられ、初心に返ることができたと思います。

(文責 青木 志帆)

第5分科会 「若手教員しゃべり場 -信頼される教師として-」

●講師 保野 純一 氏(大阪市立中川小学校 教諭)

●コーディネーター 井上 政嗣

第5分科会では、「若手教員しゃべり場」として、大阪市立の小学校に勤めておられる安野先生に、ご自身の経験をお話いただきました。現役の学生や若手教員を中心として15名ほどの参加者があり、質疑応答から参加者の交流を深め、活発な分科会となりました。

安野先生からは、保護者対応や児童との接し方、民族学級について、主にお話いただきました。初任から5年目の間は、保護者との関係がうまくいかない時期があったことから、つたない点は頭を下げることや一度客観的に見て冷静に対応することが大切であると振り返られました。児童との接し方では、自分の感情を収めようと怒鳴ることで静まらせても、それは児童に伝わっており、学級経営がうまくいかないことや子どもとの関係が作れないこと

があったことから、現在では、まず楽しむ気持ちを持ち、自分のやり方でリラックスして関係をつくることに努めておられることをご報告いただきました。また、民族学級についても詳しくご説明がありました。文化や歴史、言葉を学ぶ授業時間であり、大事なことは隠さずに自分自身を知ることであると語られました。

最後には、質疑応答の中から出された、日々の職務でのストレスについて、どう解決するかについて深めることができ、同僚との関係性やサポート体制が必要であることを確認しました。日々の忙しさの中で、なかなか実践を交流したり、思いを共有したりすることが難しいため、貴重な機会となりました。

(文責 井上 政嗣)

